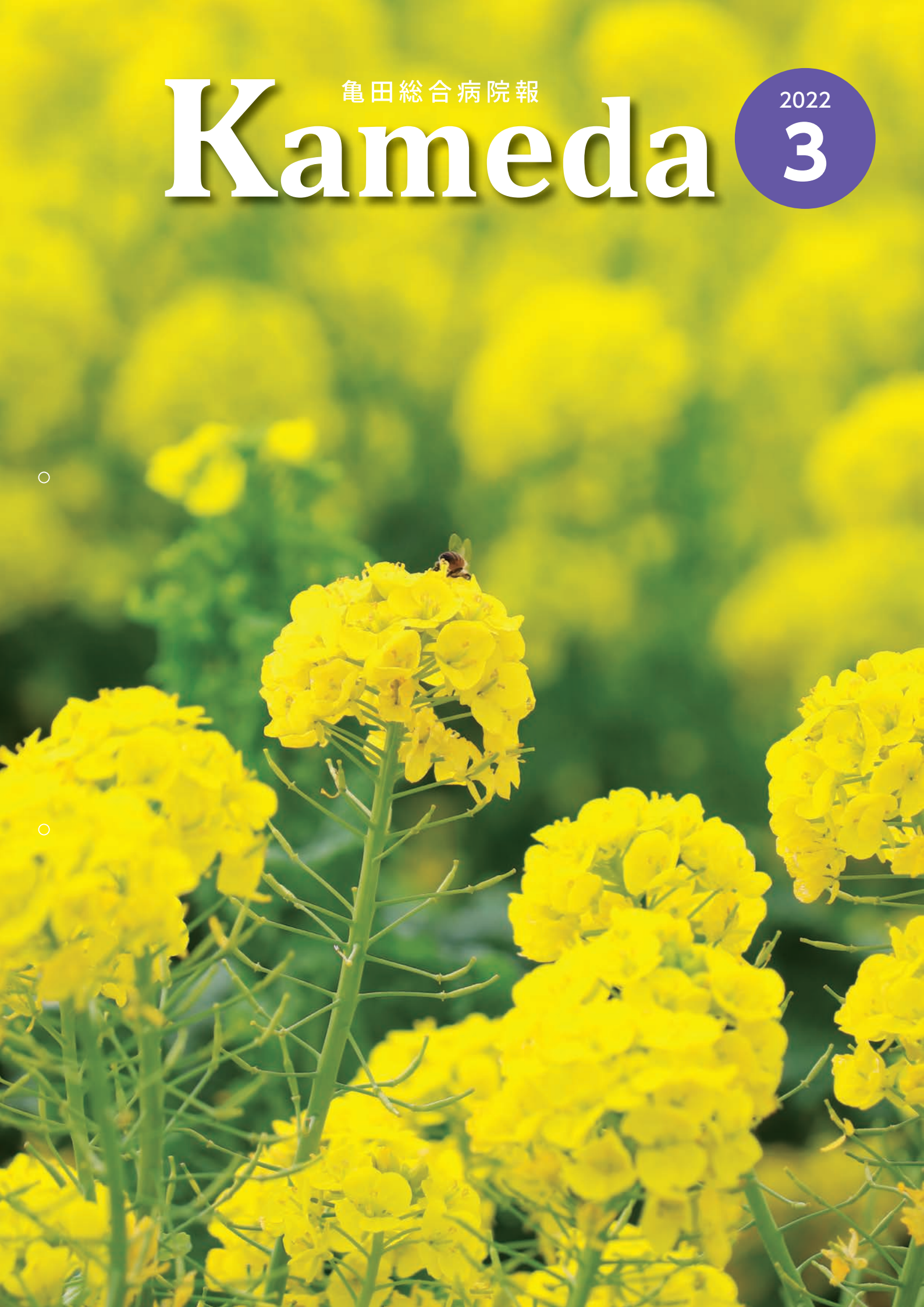


Kameda

亀田総合病院報

2022

3



今年こそは明るい年に

医療法人鉄蕉会 理事長 亀田 隆明

2020年1月29日、私たちが中国武漢市からの航空便によって帰国された方々の受け入れをおこなってから、ちょうど2年が経過しました。

未だに毎日報道される新規感染者の数、政府関係者ならびに専門家の解説と予測、国民が皆ウイルスに振り回され続けた2年間でした。

しかしこの間、新型コロナウイルスはウイルスの特性でもある変異を繰り返し、弱毒化と感染力の増強がはっきりしてきました。現在は、幼稚園や小学校をはじめとする学級閉鎖、臨時休校などが増加し、数十年前、私たちが子供の頃毎年のように経験していた様子と酷似してきています。

私はもちろん感染症の専門家ではありませんので詳しいことは知りませんが、私たちが子供のころによくひいた風邪の原因ウイルスは、ライノウイルスが最も多く、次に多いのがコロナウイルスだということはよく知られたことです。したがって、コロナウイルスが消えてなくなる可能性は全くないといっても過言ではないでしょう。では、どのようになるとら通常の社会生活に戻れるのでしょうか。

現在の新型コロナウイルス感染症は法律上、2種感染症、つまり結核と同様の位置づけとなっており、陽性者はもとより濃厚接触者も隔離しなくてはなりません。確かに2年

前、海外で多くの人たちが病院に運び込まれ呼吸器をつけられているTV報道や、グローバルな感染拡大と重症化をみて2種感染症に位置づけたのは当然の判断だったと思います。しかし、最近のPCR陽性者やコロナ感染症を発症した人たちの様子は大きく変わってきています。ワクチン接種を含めた今までの政策の効果もあり、明らかに重症化リスクは激減しているように思えます。

一般的に感染力の強さと毒性の強さは反比例しますので、弱毒化していることは事実だと思います。あくまでも個人的な意見ですが、いよいよ通常の社会活動に戻すタイミングが近づいてきたなと感じています。日常を取り戻すためには、まず現在のコロナ感染症の位置づけをインフルエンザなどの感染症と同様の5種感染症への変更が必要となります。

政府や専門家にとって決して簡単なことではないと思いますが、現在の感染症の特性、感染状況、社会状況を総合的に考えて、国民にとって最も良い判断を最も良いと思われるタイミングで実行していただけることを願っています。

今年の早いうちに正常な社会に戻り、子供たちや若者が思いっきり大声で笑い、みんなで楽しく過ごせる日が来ることを心から願って止みません。

職場最前線

80

《経営企画部》



2005年に全室個室の入院病棟（Kタワー）、2012年には施設の耐震強化を目的に4床室をメインとした入院病棟（A棟）が完成したことで、1989年に21世紀を見据えて描いたマスタープランが一区切りを迎えました。

それから10年。安房地域では少子高齢化や貧困化が顕著となり、進学や就職をきっかけに東京へ出た若者は地元へは戻らず、人口減少が加速しています。災害被害に新興感染症の流行と、地元経済が大きな打撃を受けるなか、間もなく「団塊の世代」800万人が75歳以上の後期高齢者となる2025年を迎えます。

これまで地域医療の充実を目指して事業拡大を進めてきた当院も、新たな局面に立たされています。質の高い医療を提供し続けるため、データを武器に安定した経営を行う番頭として、病院の屋台骨を支える経営企画部の取り組みを取材しました。

経営企画部の紹介

医療法人鉄蕉会 経営管理本部に組織される「経営企画部」は2015年4月、それまでの「経営企画室」から引き上げられる形で発足しました。法人全体の経営状況に関して幅広く情報収集・分析を行い、経営者の意思決定をサポートするとともに、現場改善や新規事業を推進します。さらに法人の各部門・各事業所のマネジメント強化を目的に2018年7月には部内に「事業管理室」が設置されました。

指揮するのは、大手総合商社で長年ヘルスケア事業に従事した経歴を持つ野々村純部長(以下野々村部長)。大手自動車メーカーとの合併会社での病院経営コンサルや、中国の国有企業との合併会社の設立、現地病院の経営改善などに携わった経験をいかし、7名(2022年1月現在)の部員とともに、医療法人鉄蕉会の中期経営計画の立案や新規事業の立ち上げなどを主導しています。



医療と経営

わが国では、赤ちゃんからお年寄りまで、すべての国民が健康で長生きできる社会を目指し、1958年に医療サービスに全国一律の公定価格が導入され、1961年に国民が医療機関を安価に受診できる国民皆保険制

度が確立しました。この制度のお陰で、ケガをしたり病気になった時に、誰もが安心して病院を受診することができるようになりました。

医療は生命に直接関係しており、収益性が低いからといって、救急医療や周産期医療、小児医療をやめてしまつては地域医療が崩壊してしまいます。そのため、医療サービスは公的性格をもつものとされ、地域医療の担い手である病院や医療法人には、その運営に非営利性と公共性が求められてきました。

しかし、少子高齢化の進展による医療保険財政の悪化により、国は医療費抑制に大きく舵を切りました。これに伴い、医療制度も2000年頃から「効率性・生産性」が重視されるようになり、病院にとっては本当に必要な医療を効率よく提供しなければ、経営が成り立たない状況となりました。

野々村部長は、「病院が良い経営状態にあることは、患者さまに質の高い安心の医療を提供し続けるためにも、働く職員の生活を安定させ、働きやすい環境を整備するためにも重要」だと。経営企画部では「鉄蕉会全体の収益を改善し、品質を向上させるために、各部門、各事業所の課題を分析し、改善するサポートを行っている」といいます。

新型コロナが与えた経営への影響

2019年末に突如として世界を混乱に陥れた新型コロナウイルス感染症は、

医療経営にも大きな影を落としました。

政府は2020年4月7日、1都7県に対し「緊急事態宣言」(1回目)を発令。その後、対象地域を全国に拡大し、5月末まで不要不急の外出自粛や人との接触抑制への協力を国民に呼びかけました。この時期、全国の医療機関がそうであったように、当院でも患者さまの“受診控え”が起こり外来診療や健診事業の売上が激減、わずか数か月で赤字が膨れ上がり、病院の経営を大きく圧迫しました。

「そもそも病院というのは、資本がそれほど厚くないため、赤字が膨らむと途端に経営が行き詰ってしまいます。人財を大切にしながらもっと売り上げを伸ばし、コストカットするにはどうしたらよいか、コロナ時代に対応した中期経営計画の策定や、赤字事業の見直し、新規事業の立ち上げが急がれました」と野々村部長。

中期経営計画 (2020年度～2022年度)

2020年度から22年度の中長期経営計画では、「コロナ時代に対応する、迅速かつ柔軟な経営」が方針に据えられました。

新型コロナウイルス感染症が世界で猛威を振るう環境下では、どうしても感染の状況に応じて収益の変動が激しくなります。そこで、「医療需要の拡大時期にはアクセルを踏み込み最大限の収益を実現する一方、感染が拡大し急激に収益が減ったら、急ぎブレーキをかけて意識的にコスト

を減らすことでダメージコントロールをする。毎月の状況に応じて、アクセルとブレーキをスピーディーに使わせる筋肉質な経営基盤を今のうちに構築することができれば、感染が収束し、社会が平常化した時に高収益を実現することができる」と野々村部長。

そのための重点施策として、手術室・集中治療系の拡充・強化による増収、赤字業務の徹底的な見直し、医療機器・設備・IT投資の厳格化、コロナ関連サービスの拡大などを打ち出しました。またそれら重点施策に取り組むため、13のプロジェクトを発足させ、目指すべき目標に向かってどのようにプロセスを管理して進めていくのか、指標管理も強化しました。

迅速かつ柔軟な 経営のために

まず手をつけたのが経営の安定化と、コロナ関連サービスの拡大でした。

野々村部長曰く、「病院改善の基本は、とにかくすべてを“見える化”すること」。事業所ごと、診療科ごと、あるいは医師ごとに業績を見える化し、現在がどういう状況にあり、損益を分析し、他所とベンチマーク比較しそれが良いのか悪いのか、データにまとめ共有します。客観的な事実を理解してもらうことで、改善するためには何をどうすればよいのか、現場の気づきを促します。

この時、経営企画部が果たす役割りは、「現場の皆さまが改善を推進できるよう、提案・側面支援し、化学反応

を起こす触媒となること」と野々村部長。「誰かにやってもらうのではなく、皆さまの将来のために、自ら改善に取り組んで頂きたい」とも。

そして、それぞれ大きな目標を分解して、数百項目を超える改善リストにして取り組みます。現場から出てくる「ムリ」とか「できない」といった声に対しては、その度、できない理由を一つ一つ丁寧に聞きながら、問題の真因を探りどうやってそれを解決するのか、ToDoリストでやるべきことを一覧にし、誰が、いつまでに何を行うのか、ということを決め、実行過程で問題があればまたそのサイクルを繰り返すといえます。

毎月の経営状況分析により、コロナ下の切迫した危機感を各現場と共有することができ、必要に応じて経営企画部から事業所に人を派遣し、粘り強く支援を続けた結果、短期間に多くの改善を進めることができたそうです。

<改善事例>

新型コロナウイルスの感染拡大で大きな打撃を受けたのが、遠方から当院の医療サービスを目指してやってくる患者さまの玄関口である「亀田京橋クリニック」でした。外来診療や健診事業の受診控えが起こり、コロナ下だからこそ、都会だからこそできる新たなサービスに急ぎ取り組む必要がありました。

そこで、遠方からの受診は不安だという患者さま向けに「オンライン診療」を強化し、クリニックでの会計待ちなどのストレスを減らし、すみやかに院外薬局で薬が受け取れるよう、医療情報アプリ「NOBORI」によるオ

ンライン決済を導入・推進しました。アプリでは外来の待ち時間の目安も表示されるため、診察の待ち時間なども有効に過ごしていただけるようになりました。

健診事業では、営業担当が新規大型顧客の開拓を精力的に行う一方で、現場スタッフがさまざまな改善に取り組んだ結果、1日当たりの人間ドック受診者の受入増を達成するなど、岸本誠司院長のリーダーシップやスタッフのチームワークで大きな成果を上げることができました。

「改善と言うのは簡単ですが、とにかく徹底的に問題を分析して、ToDoリストをつくり、粘り強く“できるまでやる”ということが大切です。現場で継続的に支援するスタッフがいないと、なかなか成功しません」と野々村部長。各事業所の事情を把握しつつ、法人全体を俯瞰する視点を持った経営企画部だからこそこの気づきや改善支援もあるといえます。

特に地理的に離れた事業所では、経営改善に向けてさまざまな取り組みを行っているものの、本院からの支援も薄く、成果が思うように伸びてこない場面があります。



そこで事業管理室では、昨年、神奈川県厚木市の亀田森の里病院を重点的に支援しました。和泉竜也室長によれば、「毎週のように現場へ赴き、看護や医事、総務など各部門の動きを把握し、担当者とのヒアリングを繰り返したこ

とで、経営分析上の数字だけでは見えてこない、その事業所ならではの事情や課題に気づくことができた」とのこと。withコロナにどう対応していくか、経営の安定化に向けた病床運営をめぐる課題では、神奈川県重点医療機関協力病院として対応することが決まる中、本院医事管理部や感染対策本部などの支援を得て準備を進めたといいます。

また和泉室長の場合、銀行という異業種から病院に出向している立場だからこそ、「病院には、多くの職員が働き、連日多くの患者さまが医療サービスを求めて足を運んでくださっている。それだけ頼られているということでもあり、それはすごいことだなと感じる」といいます。だからこそ、地域に必要とされる医療サービスを提供し続けていくためにも、業務の効率化や改善を進めていくことの必要を強く感じるそうです。

より効果的な病院改善を目指し、和泉室長が大切にしているのは、「医療の質と業務の効率化のバランス。今までのやり方を変えずに生産性を上げよう」とすると、現場にさらに負荷をかけることになります。ITやシステムをうまく取り入れ、業務の効率化を図っていくことで、医療の質をしっかりと担保しつつ安定した経営ができると考えています」とのこと。

アジアのメイヨー・クリニックを目指して

赤字事業の解消と収益力の向上で、基礎体力がついてきた一方、ポストコロナで攻めに転じるための体力向上の施策も鴨川事業所を中心に始まっています。

<設備投資>

「亀田ビジョン2030」において、亀田俊明病院長はアジアのメイヨー・クリニックを目指して2030年までに手術件を年間30,000件にするという大きな数値目標を掲げました。

そのためには麻酔科や外科系診療科の強みを活かし、手術室・集中治療系の拡充・強化が欠かせません。そこで、亀田総合病院B棟に5室の手術室を増設することになりました。増設にあたっては、感染症患者さまの手術にも対応できる手術室を設ける事になり、世界の医療事情に精通した品質管理部のアントニオ シルバ・ペレス部長に世界の最新のベストプラクティス(もっとも優れた取り組み)の感染症対応の手術室がどのようなものなのかをリサーチしてもらい、工事計画に反映させました。間もなく完成予定です。



手術室改修会議の様子

また、2020年に見送った手術支援ロボットも、2021年末に導入することができ、B棟の手術室増設工事が終り次第、手術室や洗浄室の拡張工事を進める予定です。

近年多発する大規模災害に備え、災害時も患者さまや職員の安全を確保しつつ、基幹災害拠点病院としてしっかり役割を果たせるよう、旧耐震基準で建てられたD棟内の機能(不妊治療を行うARTセンターやドクターオフィス、リハビリテーション室)の移転や透析センターの機能更新も急がれました。そこで、災害時拠点強化緊急促進整備事業や医療提供体制施設整備交付金などの補助金をいただいて災害対策棟「G棟」の整備を進めました。

G棟には発災時に帰宅困難者や負傷者等を受け入れるためのスペースを設けたほか、備蓄倉庫、大型非常用発電機も新たに整備し、基幹災害拠点病院として一層の機能強化が図られました。



建設中のG棟



建設中のG棟を視察

<人事面>

人事関連の施策としては、「モチベーション向上と人件費適性化を同時に実現」するため、なるべく人を増やさず業務改善を行う必要があります。職員一人当たりの収益や生産性の向上に取り組むことで、利益が上げれば、一人当たりの給与向上も実現可能となります。そのためにも、まずはコロナだから赤字でも仕方ないと嘆く前に、収益を改善し、どうやって処遇に反映させるかということを考えて取り組んでいます。

職員の自発的な業務改善活動を推進し、亀田全体のカイゼンマインドを組織的に醸造するため、院内各部門と協力して「亀田改善アワード」を2020年11月に創設。各部署から、医療の質向上・医療提供サービスの改善、収益増加・コスト削減、職場環境の改善、その他経営のレベルアップに資する提案を募り、初年度は各事業所から98の改善提案がエントリーされました。

新たなステージへ

医療法人鉄蕉会の中心事業所である「亀田総合病院」のある安房地域は、すでに高齢化率が40%を超え、人口減少が止まりません。地域に必要とされる質の高い医療を提供し続けていくためには、地域医療圏と保険診療のみの収入から脱却する必要があり、さらに自由診療の収入を増やすためには、健診事業や国際事業

が重要になってきます。

中国をはじめアジアの富裕層は、安心・安全な医療に非常に高いニーズがあり、多少費用が高くても、いい医療を受けたいと考えているそうで、「鉄蕉会の世界水準の医療というのは、JCI含めて非常にレベルが高いので、世界に十分通用すると思っています」と野々村部長。

また、国際事業の収益が大きくなれば、優秀な医療スタッフにはそれにふさわしい処遇ができるようになり、指導的立場を提供することもできると考えているそうで、「ローカル市場の限界を打破しつつ、成長を継続し、地域の雇用と経済の発展に貢献することが可能になる。だから、経営改善という小さな枠組みだけに囚われず、成長戦略を意識して、各診療科を伸ばしていく必要がある」とのこと。

「海外から患者さまに来て頂くためには、国際標準に合わせた病院経営とQI (Quality Indicator) の開示が不可欠です。亀田の医療の質が高く、安全であること、患者満足度が高いことを客観的に示さなければなりません。また、従業員満足度が高くなければ、これらを向上させることは出来ません」とも。JCIに取り組んできた良き伝統をさらに発展させることが望まれます。

<木更津プロジェクト(仮称)>

昨年末から、新たな事業計画も動き始めています。

亀田隆明理事長は2025年に木更津への進出を明らかにしました。そのコンセプトは「先進医療を軸としたハイ

レベル超急性期病院」。平均の在院日数を一週間以内とし、合併症のありそうな複雑な難しい患者さまは鴨川の本院に送り、都心で働くビジネスパーソンなど、できるだけ週末を使って手術を行いすぐに帰りたい、あるいは短い期間で治療を終えて帰りたいという患者さまを想定していると野々村部長。「羽田空港からも車で20分という好立地のため、日本全国、海外からも沢山の患者さまにいらして頂きたい」と。

在院日数が短い病院で病床稼働率を高く維持するためには、地域の患者さまだけでなく、オンライン診療などでより広域から患者さまを集める仕組みを今のうちに作っておくことが必要です。人気があるのは最初だけで、あっという間に新規患者がいなくなってしまうということにならないよう、継続的・定期的な集患の仕組みが求められます。「今のうちからオンライン診療を推進すること、新たなマーケティング戦略が必要」とのこと。

新型コロナウイルス感染症の世界的流行から3年。依然として先行きが不透明な世情ですが、経営企画部の活躍が期待されます。



CLOSE UP NEWS

クローズアップニュース

院内成人式

1月6日(木)午後1時より、Kタワー13階ホライゾンホールで院内成人式が行われ、2001年4月2日から2002年4月1日生まれの対象者12名のうち、11名が出席しました。

式には亀田隆明理事長はじめ、渡邊八重子看護部長や野口正之人事部長が出席し、新成人の門出を祝しました。

「おめでとうございます。なかなか収束の見えない新型コロナのパンデミックの時代に成人を迎えた皆さん、今はいろいろな職種の人たちがチームを組むチーム医療の時代です。一人ひとりが重要な歯車としての働きをしなければ良い医療はできません。皆さんには社会的にも医療人らしく一人前になってチームの一員として活躍されることを期待します」「人生100年時代、65歳定年、更には70歳定年と言われる中、皆さんには職業人生があと50年もあります。自分のやりたいことや意義があることに思いきりこだわり、目指すキャリアを積んでいってください」「亀田には、やりがいの持てる職場や仕事がたくさんあります。自分らしい職業人生をしっかりと歩んでください」など、お祝いと激



励の言葉が贈られました。

また出席者からは、「院内成人式を開いていただき、ありがとうございます。今年は何事にもチャレンジしていく年にしたいと思っています」「とても緊張しましたが、お祝いしていただき、とても嬉しかったです。新成人を迎え、更に成長できるよう日々努力していきたいと思っています」「病院でも成人式があるとは思っていませんでした。社会人として自覚を持ち精いっぱい頑張りたいと思います」「20年間、支えてくれた全ての方々に感謝し、一人の大人として強く生きていきたいと思っています。素敵な式を開いてくださり、ありがとうございました」など、感想が聞かれました。



JCIの認定を更新



国際的な医療機能評価機構である JCI (Joint Commission International) を、2021年12月4日付で更新しました。国内初となる 2009年の JCI 認証から、4回目の更新となります。

感染症の影響で審査員が来日できないことをうけ、今回はすべての審査がオンラインで実施されました。現場の審査は、ナースカートにノートパソコンなどを取り付け移動しつつ行われました。

品質管理部のアントニオ シルバ・ペレス部長は「オンラインは、審査員の移動時間を利用して準備するなどの作戦が使えず大変なこともあつ



た。しかし終わってみればこれまでで一番指摘事項が少ない更新となった。今後も審査の準備のためではなく、次に来院される患者さまが安心して受診いただけるよう、より一層医療の安全と質の向上に努めたい」と話していました。

審査対象となった施設は下記の通りです：

- ・ 亀田総合病院
- ・ 亀田クリニック
- ・ 亀田リハビリテーション病院
- ・ 亀田京橋クリニック

秋季防災訓練を実施

2021年12月18日(土)午後2時より、亀田総合病院S棟3階臨床検査室の保管庫を模擬出火場所に想定し、秋季防災避難訓練が行われました。

当院では、万一の災害に備え、年2回、消防法に定められている火災を想定した防災避難訓練を実施しています。

訓練は、臨床検査室の成分採血室に患者さまがいる状況で火災が発生したと想定し、火災の発見から初期消火、消防署への通報、直上階の状況把握、棟内放送、全館放送による火災対応状況の把握、避難、誘導、防災本部(中央監視室)に被害状況の報告などの一連の流れを確認しました。

また避難訓練終了後には、A棟1階ピロティにて消火器と消火栓を用いた初期消火訓練も行われました。参加した職員たちは消火器・消火



栓の訓練に積極的に関わり、万一の事態に備えた秋の防災避難訓練は、78名の職員が参加し滞りなく終了しました。

医療の



今号は…

「オンラインHDF

（血液透析濾過）」

この春、透析センターが新棟に移転します。新しくなる透析センターでは、全装置電解水オンラインHDFに対応できるよう設備面を強化、生体適合性に優れた酸化ストレスを軽減する透析を実現することで合併症を減らし、QOL（生活の質）向上と生命予後の改善を目指します。

回答者

泌尿器科部長／透析センター長
久慈 弘士 医師



Q. 腎臓のはたらきとは？

A. 腎臓には、体内の不要な老廃物や余分な水分・水分を尿として体の外に捨てる働きがあります。その他、体の電解質のバランスを保つ、血圧を適切に調整する、骨や赤血球をつくる働きを助けるなど、生命の維持に重要な役割を果たしています。

病気により腎機能が落ちると、むくんだり、血圧上昇、貧血、夜間多尿など、体に不調をきたします。腎臓の働きが慢性的に低下した状態（慢性腎不全）になると、腎機能の回復は見込めず、食事療法や投薬によってその進行を遅らせる治療を行います。

しかし、治療や管理を行っても腎機能の低下が進行して末期腎不全の状態になり、生命の維持がおびやかされる場合、腎臓の働きを補うために透析療法や腎移植といった腎代替療法が必要となります。

Q. 透析のしくみとは？

A. 透析療法とは、人工的に血液中の余分な水分や老廃物を取り除き、血液をきれいにする働きを腎臓に代わって行う治療法で、体外の機械に血液を通す血液透析と、患者さまご自身のお腹の膜（腹膜）を利用する腹膜透析があります。

血液透析は国内の透析患者の97%が行っている最も普及率の高い腎代替療法で、一般的に週3回の通院（治療は1回あたり4～5時間程度）が必要です。治療中は血液を血管から毎分200ml程度取り出して透析装置に通す必要があるため、あらかじめ血液を体外に十分量送り出せる血管アクセスと呼ばれるルートを手術で作成しておきます（動脈と静脈をつなぎ合わせて血管を太くする内シヤントが代表的な術式です）。長く血液透析を続けるためには、食事と水分の制限や血管アクセスのケアなど患者さま自身でしっかりと管理する必要があります。

Q. オンラインHDFとは？

A. HDFとは血液透析濾過の略で、一般的な血液透析（HD）に濾過操作を加えた透析方法です。血液中に補充液を入れて同時にその分を濾過することで、通常の血液透析と比べ大きな分子の老廃物や毒素も除去量が増え、かゆみや関節痛、下肢イライラ感、透析中の血圧低下などの改善が期待できます。

オンラインHDFとは、血液透析で使用する透析液をそのまま補充液として使用するHDFのことで、大量の補充液を透析器の中で回路内に入れることが可能となり濾過の効率が高まりました。ただし、細菌などの汚染が無いきれいな透析液の使用が必要条件になります。当院では超純水透析液（極限まできれにした透析液）を使用しており、新棟ではそれに加えて電解水透析[※]を導入し、患者さまが元気で長生きできるよう質の高い透析を目指します。

（※）：電気分解により得られた「水素を含有した透析用水（電解水）」を用いて行う透析療法。抗酸化性のある水素により体内の酸化ストレスが中和され、倦怠感などの自覚症状の改善や、腎不全に伴う様々な合併症の予防が期待される。

亀田 本舗

『ザ・マン盆栽』

パラダイス山元：作

文春文庫PLUS、680円（税込）



先日立ち寄った花屋で、お惣菜のようにパック詰めされた「苔」が売られていた。

ふかふかのベルベットのよ
うな質感のヤマゴケに、「イタ
チのシツポ」という別名を持つ
ヒノキゴケなど、「一口に「苔」
といってもその種類はさまざま
だ。何しろ世界には2万種類
も苔があるそうで、湿潤な気候
を持つ日本は世界的な苔の産
地として知られる。

近年、そんな苔が静かなブー
ムになっているのをご存知だ
ろうか？ かつて苔というとい
日本庭園や盆栽など限られた場
で鑑賞されるものだったが、最
近は室内で鑑賞用の苔を育て
る「苔テラリウム」に代表され
るように、カジユアル感覚でリ
ビングに飾る人も増えている。
苔テラリウムは、「小瓶の中の
ちいさな世界」として、観葉植
物とはまた違った癒しを与え
てくれるインテリアとして人
気だ。

ちなみに前述の花屋で2種
類の苔を手に入れたわたしは、
早速、自宅で他の植物や庭先
の石、ジオラマ用の牛や人物
のフィギュアを飾って「テー

カップのなかのちいさな世界」
をつくってみたわけだが、器と
して使ったカップ&ソーサー
が掛け軸にありそうな日本の
里山の風景を切り取ったデザ
インだったこともあり、苔と相
まって不思議な趣深さが出た。
そんな話をしたところ、知り
合いから1冊の本を紹介され
た。

作者はパラダイス山元氏。富
士重工業のカーデザイナーを
経て、ラテン音楽を中心に活動
するマンボミュージシャンと
なり、現在は会員制の餃子店を
営んでいる人物だ。その他に、
グリーンランド国際サントク
ロース協会の「サントクロー
ス試験」に合格した公認サントク
ロースであり、入浴ソムリエや
マン盆栽の家元など、さまざま
な肩書を持つ趣味人である。

紹介されたのは、彼の著書の
うち『ザ・マン盆栽』という本
だった。

マン盆栽とは、鉢植えの植物
にフィギュアをのせてジオラ
マのようにして楽しむグリー
ンアートのことで、パラダイス
山元氏が創案。家元として30
年にわたり普及活動に努めて

いるそうだが、伝統的な従来の
盆栽愛好家からは「盆栽の上に
人形なんか置くものじゃない、
盆栽が泣いておる！」などと、
しょっちゅうお叱りを受けて
いるらしい。

ページを開くと、「ママ、撮っ
て！」「懲りない原作」「ファイ
ト！一発！」「ヌーディスト諸
島」などの作品タイトルと共
に、パラダイス山元劇場ともい
える物語を想像させるマン盆
栽の世界が広がっていた。わた
しが知らずに楽しんでいたの
も、ジャンルからすると苔テラ
リウムというよりはマン盆栽
だったようである。

盆栽にフィギュアをプラス
することで、盆栽本来の「見た
て」の遊びをポップに表現した
マン盆栽の世界。あなたも覗い
てみてはいかがだろうか。

（蝸牛庵）



転がる石のごとく

最終回

元広報室長



私が前任者から広報室長を引き継いだのは1990年、30代半ばのことだった。前年に昭和が幕を引き、医療法人鉄蕉会としては、千葉市幕張地区に「亀田総合病院附属幕張クリニック」を10月に開設した。

「バックトゥザフューチャー」のドクにデロリアン[※]を借り、3年後の1993年にバブルが崩壊すると教えに行つてあげたいくらい、世の中はバブルに踊つていた。

※米国のヒット映画の車型タイムマシン

1989年に米国のコンサル会社を使ってマスタープランを策定したばかりの亀田は、パーキング棟、看護学校の増改築、S棟と、1995年の亀田クリニック開業を目指し、周辺環境を整えていた。また紙カルテからデジタル化を目指し国内いや世界初の統合型医療情報システム（Queen）の開発をはじめ、Ace（建築計画）、King（要員計画）と3本柱のプロジェクトを夢中で走らせていた。

やがてバブルがはじけ、大手銀行や証券会社がバタバタつぶれ、貸し渋りや貸しはがしに社会全体が萎縮した。亀田クリニックの完成だけを見すえて職員は必死だった。

1995年4月の亀田クリニック開業を控えた新年早々、テレビから流れてくる映像に言葉を失った。阪神淡路大震災だった。

続いて3月20日、1989年の坂本弁護士一家殺害事件以来テロ集団と化したオウム真理教による地下鉄サリン事件が起きた。嫌な胸騒ぎを覚えつつ、亀田クリニックの開業日4月1日の朝を迎えた。

9時から診察がはじまる直前に電子カルテシステムがダウンした。複数のテレビ局やメディアが密着する目の前で最悪の事態が起きた。無我夢中でカメラをさえぎった。その迫力に気圧されたのか、映像は紙カルテにチェンジし、せわしく受け付けを行う職員の手もとを使つてくれた。

予想以上に予約システムにアクセスが集中したことが原因だった。当時はまだ100室の診察室すべてを使つていなかった。2階の7番ブロックの中待合室が野戦場の作戦本部となった。私たちはそこをひそかに「第7サティアン」と呼んだ。

驚いたのは患者さまが誰ひとりとして苦情や文句を口にされなかったことだった。予約制で待たなくていいクリニックになると期待し、長靴をやめて「張羅を着て来院して下さいました。期待に応えられなかった申し訳なさを何やらで、苦しかった。

当時のことをリアルに体験した職員も少なくなつてしまつた。あの時いただいた患者さまからの温かい言葉があったから、ここまで走つて来れたように思う。

時代はめぐり、Kタワー、新A棟とその後も次々とプロジェクトは進んだ。ITも進化し、ICTを駆使した世界が実現しつつある。クリニックの立ち上げの頃ちょうどワープロからパソコンに代わつた。それが今や「Windows 11」。隔世の感がある。あの『微笑』という本の中の小さな病院が、目の前にあるこの巨大病院だとは信じがたい。思えば遠くに来たものだ。勢い余つて定年もだいぶオーバーランした。

さて、患者さまにあの頃よりも良い医療を提供できているだろうか。不便やご迷惑をかけていないだろうか。雨で足元の悪い中、遠くの駐車場から杖をついて歩いてくるお年寄りを見るたびに考えてしまう。

「医療はサービス業である」と定義されたのは1995年版厚生白書だった。より安心で快適な療養環境、高度で信頼のおける医療、やりがいを持てる職場環境、今も昔もやることは同じだ。亀田のまぶしい時代を全力で駆け抜けた経験と記憶は、いつまでも色あせることのない私の宝物となった。

多くの感謝を込めて、
Gracias de verdad.

(完)



亀田総合病院報

No.266

亀田ホームページ <http://www.kameda.com>

2022年3月1日発行（隔月発行） 発行責任者：亀田隆明 編集：広報企画室

発行：医療法人鉄蕉会 〒296-8602 千葉県鴨川市東町 929

当広報誌は個人情報保護のもと本人の了承を得て作成しており、本用途以外の転用は固くお断りしております。

All articles on this PR magazine has been printed under the permission of the subscriber to protect their personal information.

All editorial content and graphics may not be copied without the permission of Kameda Medical Center, Public Relations which reserves all rights.